

山崎郷土叢書

NO. 102

15.9.15

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62-2000

【地域史随想】 北播磨の国あれこれ

宇野 正碓

テレビで吉川英治氏の『宮本武蔵』が放映されている。

武蔵と手を組んで「本位田又八」も登場して、ホンイデンという珍しい地名が浮かび上がっている。

(一) 佐用町に本位田という地名は実在して、有名な県社佐用都比賣神社は本位田村に鎮座しておられ、人家も多いれっきとした村であり、ほかにも南光町下三河に本位田はある。

本位田は正しくは「品位田」であって、王朝時代の親王には順位があり、一品・二品など四品まであって、品位に従って土地が与えられることになっていた。それが位田なのである。佐用郡(佐用町・南光町)の場合は親王ではなく、この頃には臣下にも位田が与えられたのでこの場合は、佐用郡内に所領のあった九條家が本(品)田を与えられていたのである。

九條道家の譲与状というのが残っているが、それには、本位田

目次

① 地域史随想 — 北播磨の国あれこれ —	宇野 正碓	1
② 「鷹匠の戊辰役」について	浅田 耕三	4
③ 中野の桓武伊和神社と 平安時代の鏡について	片山 昭悟	6
④ 子どもの頃の遊びとお手伝い	谷井 伴夫	10
⑤ 春の研修旅行	織金 達雄	12
⑥ 山崎町歴史街道(八)	会報部	15
⑦ 会報91号〜100号総目次		16

と新位田という地名がある。新位田が現在、どの村域に当たるかはわからないが、下三河に本位田の名が残るほどだから、広く捜せば見つかるかも知れない。

この九條家の領地には、(建長二年(一二五〇)十一月)播磨国佐用庄内として、東庄・西庄・本位田・新位田・豊福村・江河村・赤松村と千草村・土万村が記載されている。

われわれは、昔から郡は郡として一体であったと考えているが、郡の西部(千草村・土万村)は佐用郡と同様に、いや神戸庄までもが別個に九條家の支配下に入っていたのだった。

(二) “土万”という地名がでてきたついでに“ヒジマ”について見ることにする。

土万は時に土間とも土萬とも書いた。しかしいづれにしろ、わかりにくい地名である。ヒジといえ、人体の肘、脇かとも思う。山崎町に比地（ヒジ）があるが、揖保川の屈曲しているところからみると、肘という字からの地名かと思うが、土万村のヒジはこんな地形ではない。地名研究の熱心な先輩たちが苦心して解説したところでは、まず『播磨国風土記』に山部比治という人が里長になったとあるが、この比治は現在の地名になったと考えると、ヒジの名称は、ずいぶん古い名である。しかも、同じ風土記の中に土間村は神の衣、土の上に付き、土という字が二回もヒジと読むことで意味が通ずる（・は筆者）ことは、土すなわち泥で、湿地を意味することとなる。

土万地区の中国道が通る部分は以前の湿地を開いたところなのである。

(三) 九條家領の千草については、播磨国風土記に「草を敷いて神の座」として敷草村の説明としている。草を敷いて座ることが、山国ではそんなに珍しいことなのか。形の良い石があつて、神の座とした方が納得しやすい。敷草の説明に疑問をもっている。私見であるが、何か草に意味があるのではないか。少し長くなるが……。『播磨国風土記』を一見すると稲（水稻）の栽培の記事がある。佐用郡では「一夜の間に苗生ひたり……（中略）五月夜に殖えつるか。」宍粟郡では比治里の中に稲春の峰・揖保

郡の林田里に稲積山・神前郡の多駝里では「……大神（伊和）の軍、集ひて稲を春きき。また託賀郡賀負里では七日七夜の間に稲成熟（みのり）終へきとある。上鴨里には確造りて稲春き……の文は地名の説明となっている。

筆者は賀毛郡の河内里の文言に注目したのである。次に河内里を引用する。

この里の田は、草を敷かずして苗子を下す……。住吉の大神、上り坐しし時、この村に食し給ひき。しかるに、み供の神たち、人の苺り置ける草を解き散らして座と爲しき。……草の主、いたく患へて大神に訴え申しければ、「汝が田の苗は、必ず草を敷かずとも草を敷けるが如く生ひむ」……今に草を敷かずして苗代を作るなり。

稲作は弥生時代の初めより伝播してきたので、風土記作製の頃は、随分技術も進んでいたはずであるが、佐用、宍粟、揖保、託賀の諸郡では、引用文で知られる程度で、初種を発芽させるために温度の高い動物の生血とか、発芽に七日七夜の時間を

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL(0790)62-7588
FAX(0790)62-7589

必要としたり、田植の時の水温を高めるために、青草を踏込むとか、稲作技術を垣間見ることが出来る。

千草が敷草と呼ばれたことは再説する必要はないと思う。田植のときに青草を田に拵き込んだのを御記憶の方もあるのではなからうか。こうみると敷草村の意味が理解できる。シキクサ↓シクサ↓チクサと発音に変化付けることもできる。

(四) 千草村、土万村の名は中世の九條家に関しての逸話であるが、旧山崎町周辺の地名で史書に語られるところがある。

この話はつとに御存知の方も多いのだが、「石作荘」についてである。ずっと古くは揖保川筋で山崎以北、一宮町東市場までぐらいを石作里（播磨風土記）と呼んだ時代があつて、降つて石作郷、石作荘と変化している。源平合戦の頃に、（石作荘は旧河東村の中南部あたりと思うが）史話の一端に出てくる。この頃の当荘は、平家一族の所管する土地であつた。源氏は平家一門を降伏させて平家の所領を没収した。当地石作荘は当然没収されるはずであつたが、源頼朝は、平頼盛に返還したので平家領として存続した。頼朝が一旦は没収した土地を平家に返したわけは、かつて平治の乱（一一五九）に敗れた源義朝らは尾張で捕らえられた。義朝の長子頼朝も命を失うところであつたが、平清盛の後妻であつた池禅尼の懇請で助けられたことに恩義を感じ領地の返還を命じた。その返還の領地の中に当地の石作荘も入っていたので、長く平家一族の人たちの支配する土地のなり、永く伝えられたという美談があつたということである。

(五) 一宮町で有名な伊和神社の鎮座地は「須行名」という。読み方はスギヨウメイとかスギヨウメと短く読むのか、いまだに自信がない。正しくはスギヨウミヨウカもしれない。しかしただ、〇〇名というふうには、終わりに「名」がつく村名があつても、これは中世の村名の一種だと理解して、敬意を払う気持ちである。郡内の古文書では「名」のつくのはまだまだあるが、今回は現在使用されているものについていうと、旧城下村に「御名」という村がある。この村名も、江戸初期までは「五明」と書いてある。後五明が御名に変えられたようだ。

こうなると〇〇名とは、中世の名田の名残りだとは簡単に割り切れない。天正年間に本願寺から宍粟の門徒衆中に宛てた手紙では、「五ミヨウ」と漢字とカタカナ、ひらがなとりませて書いてある。口から耳へと伝えられたせいかもしれない。佐用郡の西に続く岡山県英田郡作東町には「五名」があり、これからすると「五明」ではなく「五名」が正しいかも知れない。こんなことを

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本店 TEL (0790) 62-0700
さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052

考えているうちに、学友から春安のうちに「ジユウミヨウ」（十名）というところがあるとの教示をうけた。すると五名・十名の五・十は人名であると都合がよい。五郎左エ門とか、十郎左エ門、又は五郎兵衛であるかも知れない。宿題として史料の発掘を待ちたい。

(六) 『播磨国風土記』の宍粟郡（宍粟郡）の中で、高家の里は高さ他の村に勝ると説明しているが、他の所より高いという発想は他にも出てくる。郡の名にズバリと高いよと名乗っている。それは今現在の「多可郡」で「託加郡」と書いてある。「この土は高ければ伸びて行けり、高さかも」と絶賛している。或いは、他に褒めようのない土地だったのか。高家里も託加郡とも同様である。にもかかわらず、宍粟と多可も、北播磨もとても優れた土地であった。いずれ機会を与えられたら御披露いたしたい。

(七) 風土記神前の郡の中に荒ぶる神が往来の人を殺したので死野と呼んだが、これは悪い名だから生野と改名したが、実は鉾山の精錬の鉾毒のため死ぬ人が多く、困難を極めたことが生野命名の真相ではなからうか。和銅年号が初めての銅生産ではなく、もっと古くから生野には銅の生産があったと見るべきではないか。

「鷹匠の戊辰役」について

浅田耕三

東京都文京区の叢文社という出版社から、今秋、創作集を出す予定にしています。四百字詰六十枚から百枚ぐらいの中短篇を七つ集めた単行本で、題名は『安政梅毒こぼれぶみ』（仮題）というのを今のところ考えています。

ちょっとショックな題ですが、これはこの本の冒頭の百十枚の作品の題で、お隣の龍野藩脇坂家の武士が、親の仇を討つため、長年苦心を重ね、日本中を遍歴しているうち、不覚にも梅毒に罹患して苦しむという話です。

諸種の記録によると、中世の室町、安土・桃山から近世江戸期にかけて、実に多数の日本人が身分の上下を問わず、この病に冒されています。しかし時の為政者は、それに対して何の予防策、治療策もとりませんでしたから、病は蔓延するばかりで、その悲惨極まる様子を背景にした小説です。

さて、話題をかえますが、実はこの会報の七十八号に掲載されている堀口前会長さんの「明治維新の話」を参考史料にして、七八年前に私は「鷹匠の戊辰役」（たかじょうのほしんえき）という七十枚程の小説をかき、『歴史読本』の小説特集号に発表しました。

その作品をもこの中に入れていきますので、その縁で当会報に、

かく一文を寄稿させてもらった次第です。簡単にその内容を申しましよう。

慶応三年（一八六七）十二月、山崎藩陣屋の大手門に、長洲の使者三名が馬で乗りつけ、家老武間（ぶま）四郎右衛門に面会を求めました。

その口上（こうじょう）は、長州薩摩を中心に九州中国筋の諸藩が連合した討幕軍がすでに京へ向かっている。貴藩はその討幕の主旨に賛同してわれら討幕軍に参加なさるか、それとも拒否されるか、返答を承りたい。

もし参加下さるならそのあかしとして、石高一万石につき兵三名と軍資金一千両、他に銃器類があればお貸し頂きたい、というもの。

長州はその前年、幕府の第二次征長戦に勝利して意気天を衝く勢いです。

僅か一万石の小藩に対する大藩の恫喝ともとれる高飛車な口上で、兵三名というのはほんの体裁、彼等がほしいの是一千両の金でした。

さて山崎藩はどうするか……。

雄藩とはいえ、薩長は外様、その外様に命じられて、由緒ある譜代の山崎本多家が、大恩ある徳川家に弓を引くなどどうしてできよう、かといって今や飛ぶ鳥を落とす勢いの薩長にさからえば、こんな小藩などたった一揉みに揉み潰されてしまう。急遽、全藩士に登城を命じ相談を重ねたが、議論百出、悩みに悩んだ結果、

藩がえらんだ苦肉の策とは……。

これが慶応四年正月の世にいう「鳥羽伏見のたたかい」の発端ですが、表向きは長州に味方したていをよそおいながら、裏ではひそかに幕府軍に参加した山崎藩士二十数人のうちに、三人の鷹匠（殿様のお鷹狩りにつきしたがってお鷹の世話をする武士）がいます。その三人は、幕府軍の一員として鳥羽伏見街道を転戦するのですが、ついにみじめな負けいくさとなり、山崎へひき上げるまでの苦心譚です。

これはそのたたかいに参加された堀口さんのご先祖が実際に経験された、いわばノンフィクションを、小説風にくらかデフォルメさせてもらったものです。

安井書店さんで販売される予定（自費出版ではありませんので値段は今のところ未定）ですが、できれば会員諸員にお読みねがえれば有がたいと思っています。

兵庫県宍粟郡山崎町中野の 桓武伊和神社と平安時代の鏡について

片山 昭 悟

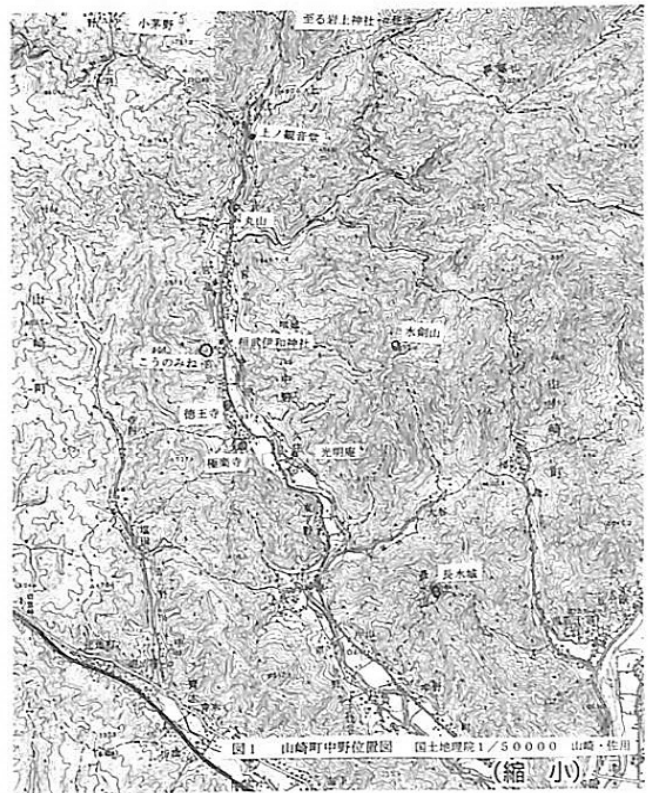
一、はじめに

兵庫県宍粟郡山崎町の北部蔦沢地区の中野小字宮ノ元に鎮座する桓武伊和神社の梵鐘は、江戸時代の宝暦十一年（一七六一）再鑄の金屋鑄物師長谷川孫兵衛藤原吉正と長谷川五郎兵衛藤原家次によるもので、桓武伊和神社梵鐘については、これまで『山崎郷土会報』八十二号に「山崎町梵鐘集成」や九十号に「長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛製作による梵鐘・半鐘集成」にも紹介させていただいている。

桓武伊和神社は、桓武天皇、素戔鳴命、伊弉諾命を祭神とする。

梵鐘銘によると「播州國完粟郡都多谷氏宮 桓武伊和大明神鐘之銘并序 夫當宮者人皇五十代桓武天皇也 延暦改壬戌秋退王室在御幸干此地而不經幾春秋而終崩御於……」から桓武天皇がこの地に狩獵をされ、途中でこの地でなくなられ、桓武伊和神社の裏山には桓武天皇の御廟所というところがあり此の地で崩御されたとの言い伝えがある。

桓武天皇を祭神とされることから以前より関心を持ち、これまでたびたび現地調査をおこなってきた。桓武天皇（山部親王）は、



天智天皇の孫、光仁天皇の長子で、渡来系氏族（百濟系）と関連があるとされる。

山崎町金谷字湯舟口の古墳から大正時代に奈良時代の瑞雲双鸞八花鏡が出土して東京の上野にある東京国立博物館の金工室に所蔵されている。金谷鏡は平城京で出土した同型鏡が出土している。平城京出土鏡は、二条大路北側溝で長屋王邸宅近くの佐保川が大きく蛇

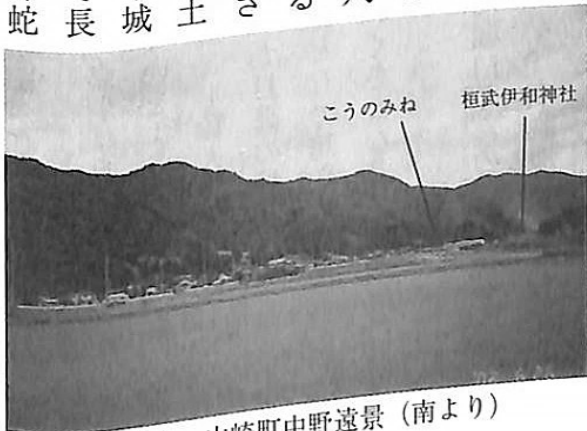


写真1 山崎町中野遠景（南より）

行する地点で、平城宮の山部門に近い所である。金谷は『播磨国風土記』宍禾郡の比治里に比定される地で、里長の山部比治から付いたとされる。

桓武伊和神社も桓武天皇（山部氏）に関連する地であり、金谷も山部氏に関連するのではないかと推定される地であり、二つの地域には何か共通するのではないかと思われることから現地での地形調査を含めて調査をしているところである。

今回、今から七十年前の昭和八年三月に桓武伊和神社の裏山を調査されたことや、桓武伊和神社の近くから平安時代の鏡が出土していることについて紹介する。

二、桓武伊和神社の調査について

昭和八年三月十一日掲載の神戸新聞記事によると、当時、宮内省諸陵寮の和田千吉氏が来られている。

和田千吉博士が薦澤の古墳へ

桓武帝の縁故陵と（？）見て

古鏡など現はる

昭和八年三月十一日掲載の神戸新聞記事より



和田千吉博士が

薦澤の古墳へ

桓武帝の縁故陵(?)と見て
古鏡など現はる

宮内省諸陵寮の和田千吉博士が、大岡山に於て、五時、山部氏に於て、桓武帝の縁故陵と推定される地を調査し、古鏡など現はる。...

神戸新聞 昭和八年三月十一日掲載

宍粟郡薦澤村中野同村第二小学校裏桓武伊和神社山林の古墳が神戸の史家松下敏氏の鑑定により、重大な謎を投げる大問題として注目されるに至ったが、その後松下氏は飽くまで謎の解決に努力すべく研究を重ねていたが、九日同氏の東道により、我國考古学殊に古墳研究の権威とされる元宮内省諸陵寮和田千吉博士が東京より来郡し、現場に於いて約五時間に亘り熱心に研究した。当日の調査では、問題の円墳は奈良朝末期から平安朝初期の構造と断定されるに至り、時代は正に桓武薨去遊ばされし頃に相当するもので、円墳の付近より経塚（高貴な方の墳墓に供養の目的で創

図2 神戸新聞 昭和8年3月11日記事より

られた)が数カ所発見され、小石に経文を刻んだ経石が数千個となく現れた。また我國では、非常に珍しい山吹双雀鏡(古代の鏡の一種)及び燧釜(ひろうり)(古代の火打具)が現れ、九百年以上前の古銭も多量に発見されたという。

三、和鏡出土の経緯について

矢野寅之助『葛澤の伝説と民話集』平成六年にも詳しく当時のことが紹介されている。

「和田博士が「キョウのつく山はないか」と言われたので、即ちすぐ南の経納山を指すと博士はすぐに或箇所を指定され、村民がそこを発掘すると、お経を書いた経石数千個と鏡(山吹双雀鏡)、刀剣二、唐銭十四、燧釜一が現れた。(山吹双鏡写真有り)折角ここまで判ったが、時局多端の折柄「桓武天皇の御陵は京都の伏見山御陵参道を左に入った処にある」ということで、当時のことについては、これ以上深入りはできないと紹介されている。

山吹双鳥鏡については、桓武伊和神社裏山ではなく、南に位置する経の尾山(経納山)より出土しているようである。そして、経石数千個と鏡(山吹双雀鏡)、刀剣二、唐銭十四、燧釜一が出土したとされる。

四、桓武伊和神社近くから出土の平安時代の鏡について

桓武伊和神社の南の山より、平安時代後期とされる山吹双鳥鏡が出土している。鏡の紋様は、鈕を囲んで山吹や雀がめぐる。界

圈があり内区と外区に分かれる。鈕には鈕座がみられる。径は約九センチの小型の円鏡で、时期的には十二世紀後半頃の鏡で、経塚からの出土が多いとされる。日本には本州から四国地方のほぼ全域に分布している。

新聞記事にも掲載されているが、鏡の所在については、平安時代の鏡に詳しい京都国立博物館工芸室長の久保智康氏に調査をしていただき、山吹双鳥鏡について直接御指導をいただいたが、現在も所在は不明である。

五、鏡の出土地について

平成十三年八月六日に鏡が出土したとされる桓武伊和神社南に位置する経の尾山(経納山)について、現地調査を行った。

桓武伊和神社の中野周辺の歴史的背景や地理的環境などもふまえて現地調査を行った。

中野周辺について宮下

(久宗)には真言宗の徳王寺、紙屋には浄土宗の極楽寺や久住には浄土宗

きれいなカラープリントの店



Specialty Camera Shop
コーポカメラ

本店 兵庫県山崎町東鹿沢 26-3 ☎ 62 - 2089
フリーダイヤル ☎ 0120 - 440 - 990
FAX 0790 - 62 - 7429
TEL 0790 - 63 - 0533

咲ランド店

の光明庵があり、同地域に寺院が存在することや上ノの平野には観音堂（順礼堂）がある。この地域には寺院が集中している。

中野宇宮ノ元から一帯をみると、南には、戦国時代の長水城がある長水山や、東には水剣山、北には一字一石の経塚がある丸山、そして、背後の山は、仁野山が見えるところであることなどからみて、重要な地点である。

桓武伊和神社からみて南の方をみると、当初は極楽寺周辺の尾根先端部の丸い山付近かと推定していたが、都多小学校の西の山に治山工事が行われていることから、周囲について関心を持っていたところ、この山も丸みがあることに気づいた。

山の所有者である中野の小田達子様によると、桓武伊和神社南に位置する経の尾山（経納山）については、すぐ南の都多小学校の体育館西の小高い丸い山で通称が「こうの峯」で、御大師さんが祀られている。現地の一帯は赤土であり、昭和八年頃に掘られたと伝わっている。このことから経の尾山の位置については、この峯が経の尾山ではないかと推定される。

六、おわりに

桓武伊和神社と平安時代の鏡の所在についても調査をしていたが現在も不明である。

私の拙い紹介によってこれを機会に、桓武伊和神社の当時のことについてご存知の方や、言い伝えについて御教示いただくことができれば幸いであり、今後解明できればと思っている。

今回資料紹介するに当たり、中野の大谷司郎氏、実友勉氏、宗平長城氏、中藤昌成氏、小田博巳氏より有益な御教示をいただいた。

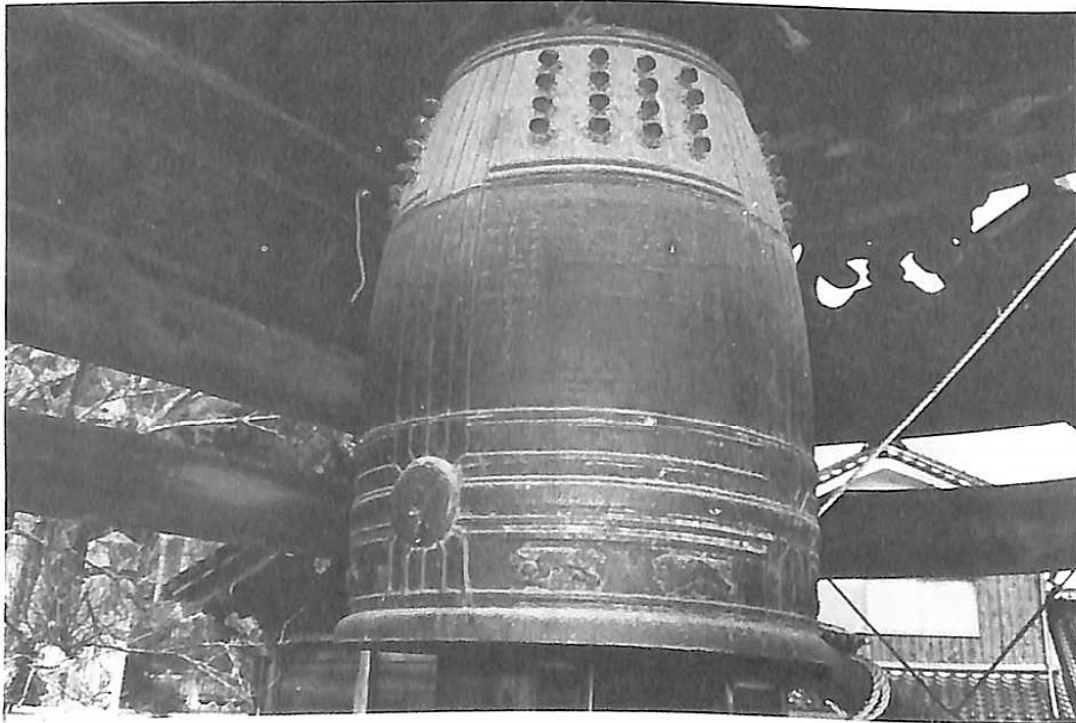


写真2 桓武伊和神社の梵鐘

子どもの頃の遊びとお手伝い

谷井伴夫

今の子どもは遊びを知らない。遊び方が分からないのだろう
か？友だちも少ないし兄弟（姉妹）もない。又、テレビのゲーム
や親が買ひ与える物が多いせいもあるのでしょうか。

私たちの子どもの頃とは、自然の環境が大きく変わったことも
あるだろう。私たちの子どもの頃は、山や川や田畑、野原、殆ど
の物が遊び場になり遊ぶ道具になりました。春は山で鶯が鳴き、
田んぼの麦の中でひばりが巣を作り、空高く舞い上がり、つばめ
が何十羽と飛び交う自然の中で育った。友だちもたくさんあり、
兄弟（姉妹）も多くあり、年長者や同級生も多く遊びながら、多
くの事を学び教えられたり、自分たちで考えたり、工夫もしなが
ら遊び、してはいけない事や危険な事や、礼儀や、ルールを身に
つけてきたと思っています。

当時は土万小学校、高等科もあり全校生が四百人余りで、私の
同級生も六十二名一クラスでした。塩山で同級生が男五人、女六
人でした。

春は山へ登りわらびやダンジ（いたどり）取り、山鳥を追った
り、野うさぎの子どもを捕まえたり、田んぼのセリつみ、岸でヨ
モギをつんだりしたものでした。

秋にかけてガンビむきや、センブリ引きに行ったり、秋葉山や

二反ダワへよく遊びに行つたものです。松の木に登り松のホヤ
（やどり木の実）を取つて女の子にやったりしたことありま
す。

ガンビは皮をむいて乾かしてたくさんたまと売つたり、又、
家で背いこ（柴や薪を背負う）の紐に編んだり、鎌などの柄に巻
いたりに使つたものです。

センブリは乾燥させてお湯で煎じて熱取りにのんだ。又、松の
ホヤは、チューインガムのようにかんで膨らませたりして遊んで
ました。

川ではジャコを釣つた
り、手でつかんだり、夕
方になると夜づけに行き、
朝早くそれをあげに行つ
て、ウナギやナマズ、ギ
ギなどを取りました。こ
れらも農家の大事なおか
ずでした。

夜は松明やガス灯で「夜
ぶり」に行く事もありま
した。川を干してジャコ
やトツチンコや赤チョコ
などがたくさん取れまし
たが、一番面白かつたの



はやはり「水あび」でした。今のようには水泳パンツなどは無かったので、スッ裸で泳いだり手拭いで隠していたものです。上級生の見守る中で大勢の子どもが賑やかに遊びました。

冬は男の子は凧あげ、駒回し、雪が降れば雪合戦に雪だるま作りなど、竹とんぼ、竹馬を作ったり、コンプツで雀とり、いしやり、水てっぼう、蟬とり、木登り、鬼ごっこ、カタナ、弓や矢、女の子はカルタ取り、百人一首、すごろく、羽つき、まりつき、縄跳び、ゴムとび、綾とり、オジャミ、いしけりなどで遊びました。

学校の校庭では、野球、庭球、ドッジボール、帽子取り、鬼ごっこ、かけっこ、縄跳びなど。砂場では相撲や鉄管（今は鉄棒）で尻あがりや回転ブランコ、何百人もの生徒であったがそれぞれ遊びのルールで余り大きいトラブルもなく、今の様ないじめもありませんでした。どのクラス、又、地域にもボスのな子どもは一人か二人位はいましたが、特

贈答品・記念品・名入タオル・ギフト全般

まどか
ギフトショップ



ロワール **円**

宍粟郡山崎町中井105-1(ジャスコ南)
TEL 0790(62)8726
FAX 0790(62)9681

ご用命は通話無料のフリーダイヤルでどうぞ
0120-338726

に問題児はいませんでした。

家事や農業の手伝いもよくしました。子守をしながら風呂の水くみや風呂焚き、草履づくり、縄ない、牛の世話、草刈りと色々あります。五月になり田植えが始まると、苗代の虫取り（これは学校の行事で全校生が参加した）養蚕用の桑の木のトップリ取り、稲の苗運び、苗取り、器用な子は田植えもします。

夏になると草刈り、田んぼの草取り、高等科になると授業が始まるまでに、校舎の回りの草刈りをするようになっていました。

五月十日の「時の記念日」には、村中のとけいの時刻合わせに回ることもありました。

秋の稲刈りが始まると、稲刈り、稲おい、稲こきの手伝いをし、麦蒔きになると、稲の株切り、株拾いがありました。

冬には麦ふみ、穂が始めると黒べとり、麦刈りと、何でも子どもに合う作業を手伝いました。

今のようには学習塾に行ったり、補習をうけたりすることもなく、遊んだり家事を手伝いながら、宿題や予習をしていました。

今の子は恵まれすぎて、問題児が出来るのではないのでしょうか。祖父母や親の問題でもあると思います。

学校が週五日制になり、私たち祖父母や地域の理解と協力が大きい役割となってきたと思います。

(注釈)

庭球のラケットは板で作った。又野球もベース、グローブもなく普通の棒で三人いるとやれるし、玉もゴムの柔らかいゴムマリ

だった。凧も自分で竹ひごを作り、障子紙を張り、新聞紙の足で木綿糸でくくり、凧糸には夜付け用の太い糸を使ったりした。女の子の羽子板もいたの手づくりで、買ってもらったりは出来なかつたが、誰も同じだから恥ずかしいとは思わなかつたのです。

春の研修旅行

織 金 達 雄

五月十一日、朝早くから小雨が降り続く中、早く雨があがることを期待しながら、七時丁度に神姫バス山崎待合所に到着した。車中だけでも明るい空気にしたいたいとの思いで、早速神姫観光の事務所へ入り、担当者と車中での研修内容及び時間配分の打ち合わせを行った。

参加者三十三名、七時三十分定時に出発、参加者が少なかつたのは、天候がぐずつくと予報されていたためだと思う。

本来なれば旅行に先立ち事前に皆様の時間を頂戴して研修会な旅行打合会を催さなければならぬところであるが、どなたもお忙しいときなので、旅行にご参加くださった方に限らせて頂き、現地到着までの時間を頂戴して研修会を行った。

研修内容は、京都の東西の通り名及び、南北の通り名を唄い込んだ「わらべ唄」をカセットテープで聞いて頂き、その唄の解説

を行った。また、カセットテープにはわらべ唄に併せて吹き込まれている鐘の音や、物売りの声など京都の風物詩の中からクイズを行った。また、カセットテープにはわらべ唄に併せて吹き込まれている鐘の音や物売りの声など京都の風物詩の中からクイズを行った。クイズに正解された五名の方には、次回研修旅行の参加費の割引をさせていただくことにした。

「京都通り名わらべ唄」には、東西路と南北路を併せて約六十本の通り名が唄われているが、これらは京都の中心部だけの通り名である。「京都の通り名早分り」法を考えると、よく知っている観光地と通り名をセットで覚え、その輪を広げていくのが良いのではないかと思う。

時間が経つのは早いもので、「京都の通り名」の話と「京都の風物詩」に関するクイズも終わる頃八大神社の駐車場に到着した。

その目の前には宮本、吉岡決闘地石碑があり、その横には、四代目の「一乗寺下り松」が植えられている。そこより二百メートルばかり坂道を上がる



と八大神社があり、ここには宮本武蔵が決闘した当時の「下り松」の古木が保存されていた。

武蔵が一乗寺下り松に立って、多数の敵にまみえた日のまだ朝も暗いうちに、彼は八大神社に立ち寄り「勝たせたまえ。きょうこそは武蔵が一生の大事。」と祈ろうとして、拝殿の鰐口まで手を触れかけたが、鰐口の鈴を振らずに、また祈りもせず、そのまま下り松の決戦場へ向かったという。

我れ神仏を尊んで神仏を恃まず

八大神社を出て、すぐ隣には詩仙堂があり、折角ここまで来たので、石川丈山の庭を拝観することにした。詩仙堂は江戸初期の漢詩人として名高い、石川丈山の山荘跡であり、丈山寺とも呼ばれている。

丈山は、徳川旗本の地位を捨てて入洛し、五十九歳のとき、ここに詩仙堂を開いて書や漢詩の世界に入り、九十歳までの生涯を詩作三昧に暮らした。

また、丈山は作庭家と

呉服とジュエリー



本店 本町(さつき通り) 62-1680

咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568
" 2Fジュエリーとくさや 63-0557

しても勝れており、鹿おどしは丈山の発明とされている。車中のクイズに出した「ししおどし」の音はここで録音したものである。

行程は順調に進み十一時にアマタ本店に到着し昼食、昼食後は聖護院を拝観されていない方で、ご希望の方を聖護院までお連れしたが、残念なことにここは昼の休憩時間のため拝観できなかった。

午後の行程は金戒光明寺から始まった。そこへ行くには大型車の通行規制、駐車禁止などがあり、遠回りをすることになった。

アマタ本店→一旦川端通へ出て、聖護院前通を金戒光明寺まで直進→バスは西門をくぐり、三門の下まで入った。そこが駐車場、三門の楼正面に後小松天皇宸筆「浄土真宗最初門」の勅額がある。

当日は法事のため案内は出来ないが、お経だけあげておきましよう、大殿でお経をあげて頂いた。そこから石段を登りつめたところが文殊塔、文殊塔の東に清和天皇火葬塚があり、その奥に八橋検校のお墓がある。八橋検校は、近世箏曲の開祖と仰がれ、今日の流行に大いに力があつた。我々がよく耳にする「六段の調べ」や「八段の調べ」は八橋検校の作曲である。京銘菓「八ッ橋」は同検校の名からつけたといわれ、毎年「八ッ橋」の業界では、墓前で追善法要をしている。もう一度文殊塔の前まで戻り、そこから北へ三十歩で「闇斎先生螢域東距三十歩許」の石碑があり、それより東へ三十七歩行つたところに山崎家の墓域が

ある。墓域に入つて西側の南から二基目が闇斎の墓で、正面に「見室宗利山崎嘉右衛門敬義之墓」とある。

広い墓地の中を北へ抜けて行くと、黒谷墓地の北東、真如堂と接して会津墓地がある。

文久二年（一八六二）会津藩主松平容保が京都守護職に任ぜられてから慶応三年（一八六七）職を辞するまでの六年間、その本陣が黒谷本山に置かれ、容保はその間、朝廷と幕府との間を斡旋し、洛中洛外の安寧秩序に努めた。

慶応四年正月に鳥羽、伏見の戦いがおこり、幕府方は淀の守りも及ばず大坂から江戸へ退き、容保もこれに従った。これらの戦いで殉難した会津藩士二百六十一人の遺骸は、朝敵の汚名のもとに顧みるものもなかったが、会津小鉄の任侠によつてその霊を埋葬した。

真如堂へは山門を通らずに黒谷墓地の方から入った。真如堂の正式名は真正極楽寺といい、天台宗。戒算上人が永観二年（九八一）延暦寺の常行堂に安置されていた阿弥陀如来像を神楽岡に移し開創した。応仁の乱のあと各地を転々とし、元禄六年（一六九三）に現在の地に落ち着いた。真如堂からの帰りには正面の山門を通り、金戒光明寺の北門からバスに戻り、あとは最終の目的地、清明神社へ向かった。堀川通を北上しながら車中より一条戻橋を確認、堀川に架かるこの橋の「戻橋」という名の由来は、三善清行がなくなったとき、父の死を聞いた子の浄蔵が熊野から京都にはせ帰ってみると、その葬列は丁度この橋の上を通っていた。

浄蔵は柩にすがって泣き悲しみ、神仏に熱誠をこめて祈願したところ、不思議にも父清行は一時蘇生して父子が言葉を交わしたという故事による。

バスを西陣織会館に駐車し、清明神社に参拝。阿倍清明が没した一〇〇五年から千年の時が過ぎようとしているので、今年から二〇〇五年まで、各地の清明ゆかりの地で阿倍清明一千年祭が行われることになり、清明神社では今年十月四日から十三日まで、「御鎮座壹千年」記念行事があるので、今回の旅行コースに加え

た。西陣織会館ではみやげを買い、また、休憩をしてから帰途についた。本日は雨天にもかかわらず、皆様のご協力をたまわり、予定時間より一時間も早く帰着できた。

今回の乗務員（運転士、ガイド）はバスで待機せずに、傘を持って観光コースを私達と行動を共にしてくださった。

「山崎町歴史街道」(八)

山崎町の史跡巡りをしませんか

会 報 部

三十三、竈築(ひちりき)神社 山崎町須賀沢(出石)

宍粟橋を渡って須賀沢を少し北上するとJA兵庫西河東支所があり、そこを右折すると目の前に「竈築神社」の鳥居が見えます。ここは愛宕山の麓にあたりますが、境内にはイチヨウ等の巨木が四〜五本あります。

この神社は宍粟郡一宮町の播磨一の宮「伊和神社」の遙拝の社といわれており、昔から雅楽の管楽器の一つ竈築(ひちりき)にまつわる伝説が二〜三語り継がれており、「播磨鑑」や「宍粟郡誌」にその記録があります。その一つは、昔神功皇后が戦勝祈願で伊和神社に参拝するためこの地まできました。しかし、こ



竈築神社社殿

こより奥はハシバミなどの雑木とイバラで道を遮り通行困難であったため、ここから遙拝し、雅楽を奏楽したことから社名としたということですが。

また一説には、平安時代の中頃(一〇七〇年頃)の後三条院の延久年間から毎年六月十五日に宮中より楽人を伊和神社に遣わし、管弦を奏楽していましたが、あるとき揖保川が洪水となって往来が出来なくなつたためこの社から奏楽をすることになりました。しかし、たまたま竈築を忘れて来ており、どうしたものかと心を痛めていたところ、内殿(内陣)より竈築のすばらしい音色が聞こえて来たのでこれに合わせて奏楽し、すべての祭典を終わることができました。人々は不思議な思いをしてそれより後、この社を竈築神社と呼ぶようになったということです。

なお、この社の境内にはイチヨウ、モミ、カヤなどの巨木がありますが、中でもカヤの木は樹高二十一メートル、幹回り三・八メートル、推定樹齢三百年と、カヤとしては立派な巨木があります。

三十四、聖山城跡(愛宕山) 所在地 山崎町須賀沢

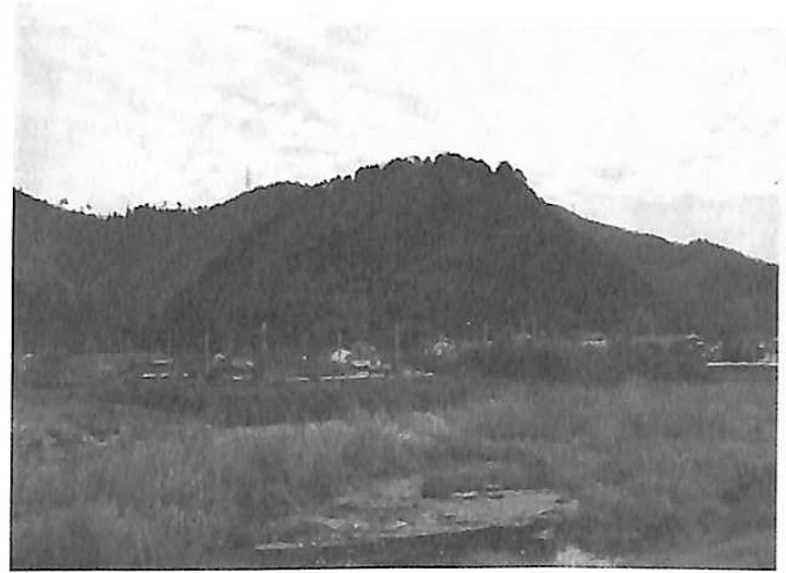
聖山城跡は竈築神社の上の山にあって、山麓の登山口から上ることができません。

この聖山城は室町時代の後半の明応二年(一四九二)愛宕山の上に築かれた山城で下村則貞の居城でした。天正八年(一五八〇)五月羽柴秀吉の中国責めるとき、この山頂に砦を構えて本陣

をおき、篠の丸城や五十波の構、そして長水城を攻め落としました。そのときの模様を宍粟郡誌には次のように書いています。「秀吉は陣を進めて榎木山（聖山のこと）に向かい、四方に壁を作り白布三十段に種々の紋を描き、旗に製して之を樹つ。翻々風に翻り、威容敵軍を壓す。」と。

現在山頂には愛宕山を祀る社が建てられています。この山からの眺望は良く揖保川や山崎町内が一望できたという事です。

聖山城と呼ばれたのは、筆築神社のすぐ上なので筆築山ともいい、そのひちりきからなまってひじりとなり聖山となったと言うことです。また、この山城を愛宕山城とも榎木山城とも筆築山の城とも言いました。



せせらぎ公園より聖山（愛宕山）を望む

すると、現在関西電力山崎寮がありますが、その場所が昔の代官所屋敷です。当時は面積千六百坪（五、二八〇平方メートル）ありました。

須賀代官は途中より生野代官の支配下になりましたが、世襲制で小針、杉尾の両氏が幕末まで勤務していました。その内容について山崎町史には次のように記されています。「この代官所の出先機関は「陣屋」と呼ばれ、また、「山方役所」とも称して、幕府領（天領）内の運上山の、鉄山稼・鉄砂稼・銀銅鉛山稼・雑木座稼・川漁稼・倉床富士野分一運上などの処理が主要な任務であった。さらに、天領内の要所には番所（須賀・皆河・三谷・中野・東安積）を置いた。」とつまり鉾山や山林、川漁の管理、そして天領からの上納米を取り仕切り、また、一般行政にも当たりました。

山崎郷土会報九一号〜百号総目次

「山崎郷土会報」第九十一号

平成十年五月二日発行

山崎町の変遷と今後（四）

―旧町周辺部と郊外地の住宅―

宇野 正碓

三十五、須賀代官屋敷跡 所在地 山崎町須賀沢

須賀代官屋敷跡は丁A兵庫西河東支所前を百メートルほど北上

松平家宍粟日記（延宝年間）

出石河岸の高瀬舟 古文書と舟板より

毛利元就生誕の地を訪ねて

石碑建立について

事務局だより

史跡マップ

堀口 春夫

森本 一二

織金 達雄

史跡部

山崎本多家ゆかりの侍グッズ紹介

草津宿本陣と近江商人の発祥地

尼ヶ端の石碑建立について

平成十一年度・十二年度役員一覧

会報部

岸本 正理

史跡部

「山崎郷土会報」 第九十四号

平成十一年九月十日発行

宍粟藩の終焉期

江戸時代の宍粟郡梵鐘集成Ⅲ

山崎町歴史街道（二）

春の研修旅行「阿波路を訪ねる」記

堀口 春夫

片山 昭悟

会報部

志水 美好

「山崎郷土会報」 第九十二号

平成十年九月五日発行

山崎町の変遷と今後（追補）

松平家宍粟日記（延宝年間）

宍粟郡内の神社（一）

江戸時代の宍粟郡梵鐘集成

長水城略史

歴史の足跡吉野を訪ねて

事務局だより

宇野 正碓

堀口 春夫

久保 寅夫

片山 昭悟

深川 定義

堀口 正信

「山崎郷土会報」 第九十五号

平成十二年五月一日発行

中寺と観音寺

宍粟郡内の神社（二）

江戸時代の宍粟郡梵鐘集成Ⅳ

上比地森ノ上遺跡の発掘調査について

当尾・柳生の里を訪ねて

山崎町歴史街道（三）

事務局だより

史跡部

久保 寅夫

片山 昭悟

山崎町教育委員会

堀口 正信

会報部

「山崎郷土会報」 第九十三号

平成十一年五月一日発行

江戸時代の宍粟郡梵鐘集成Ⅱ

松平家宍粟日記（延宝五年）

山崎町歴史街道（一）

新宮宮内遺跡（国指定史跡）発掘調査概要

片山 昭悟

堀口 春夫

会報部

「山崎郷土会報」 第九十六号 平成十二年九月一日発行

江戸時代の町・郷の行政の仕組み

堀口 春夫

エッセイ 千早赤坂村

浅田 耕三

国見山と金谷について

片山 昭悟

上比地岩田神社の神宝について

片山 昭悟

生谷西垣内遺跡の発掘調査について

山崎町教育委員会

寺内町散策と金剛山登山

岸本 正理

神谷村古文書の紹介

史跡部

「山崎郷土会報」 第九十七号 平成十三年四月二十日発行

御師にひかれて伊勢参り

織金 達雄

宍粟郡金屋村鋳物師長谷川氏について

片山 昭悟

一枚の古写真から

岸本 正理

生谷温泉記

大谷 司郎

京都七福神巡りと岩倉実相院詣り

研修部

山崎町歴史街道(四)

会報部

事務局だより

平成十三年度・十四年度役員一覧

「山崎郷土会報」 第九十八号 平成十三年九月五日発行

路傍観察(一) 世紀の境を挟んだ考現誌

宇野 正碓

山崎町出土の二つの銅鐸

片山 昭悟

山崎陣屋表門付近の写生画考

堀口 春夫

京都七福神巡り(第二回)を終えて

岸本 正理

山崎陣屋表門に史跡石碑建立

史跡部

山崎町歴史街道(五)

会報部

奈良時代の鏡研究片山さんに藤森栄一賞

会報部

事務局だより

研修部 織金

「山崎郷土会報」 第九十九号 平成十四年四月二十日発行

路傍観察(二) 世紀の境を挟んだ考現誌

宇野 正碓

江戸時代の受領名について(上)

清水 哲

田井遺跡の銅鐸形土製品について

片山 昭悟

会長退任挨拶

堀口 春夫

会長就任挨拶

森本 一一一

事務局長就任にあたって

春名 俊夫

大坂湾岸の旅

織金 達雄

山崎町歴史街道(六)

会報部

事務局だより

「山崎郷土会報」 第百号

平成十四年九月十五日発行

創刊百号を記念して

会報百号の発行に寄す

森本 一二

会報百号を記念して

白谷 敏明

山崎郷土会報百号に当たりて

壺阪 壽

百号発刊に寄せて

会報部

研修旅行の足跡

研修部

会報七十一号〜八十号総目次

屈伸し蛇行する劔

宇野 正碓

宍粟郡出土の二つの銅鐸

片山 昭悟

江戸時代の受領名について(下)

清水 哲

塩山の銀山

谷井 伴夫

上比地神子谷と中比地六反畑の埋蔵文化財

確認調査について

山崎町教育委員会

山崎町歴史街道(七)

会報部

春の研修旅行記

柳田 弘

事務局だより

外科・内科

山 中 医 院

院長 山中 陽一

山崎町西町・TEL⑥20036